

土師器甕の変遷とその背景

— 近江型土師器成立への諸段階 —

大 崎 哲 人

1. はじめに

近江型と呼ばれている地域色を持った土師器がある。1973年、松澤修氏が『湖西線関係遺跡調査報告書』の中で、「6世紀後半の土師器には近江型と呼び得る強い地方的特徴が表れてくる。」と指摘し⁽¹⁾、その後、小笠原好彦氏によって土器の移動や流通を考える上での重要な手がかりになるものとしてその存在が評価されてきた⁽²⁾。およそその特徴は、口縁部は内湾気味に開き、端部に内傾する面を持つこと、体部外面下半にヘラケズリを施すこと、ヘラ記号や体部外面にヘラ書きの圏線やハケメ摺り消し線を持つものがあることなどである⁽³⁾。

この近江型土師器、特に長胴甕の出現については宮成良佐⁽⁴⁾、大橋信弥⁽⁵⁾、田中勝弘⁽⁶⁾の先学諸氏によって論じられている。宮成、田中の両氏は竪穴住居におけるカマドの採用との関連を積極的に評価し、一方、大橋氏は6世紀後半段階での長胴甕の多様性を指摘した上で近江型土師器の成立とカマドの出現との直接的な関連を否定し、その成立を律令国家の成立との関連から8世紀以降とする考え方を提示している。

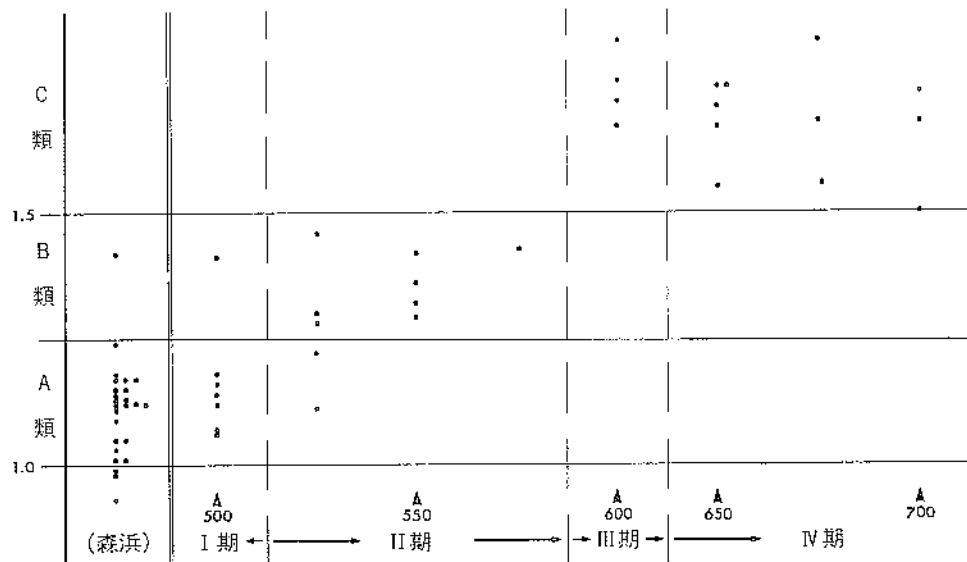
本論では、およそ5世紀後半から8世紀に至るまでの近江地域出土の土師器の甕、特に長胴化していく甕の変遷を明らかにしていくことにより、そこからその背景にある土師器生産のあり方を読みとっていくことを試みる。そしてその作業の中で近江型土師器とは何かということについて考えてみたい。

2. 竪穴住居出土の土師器甕の変遷

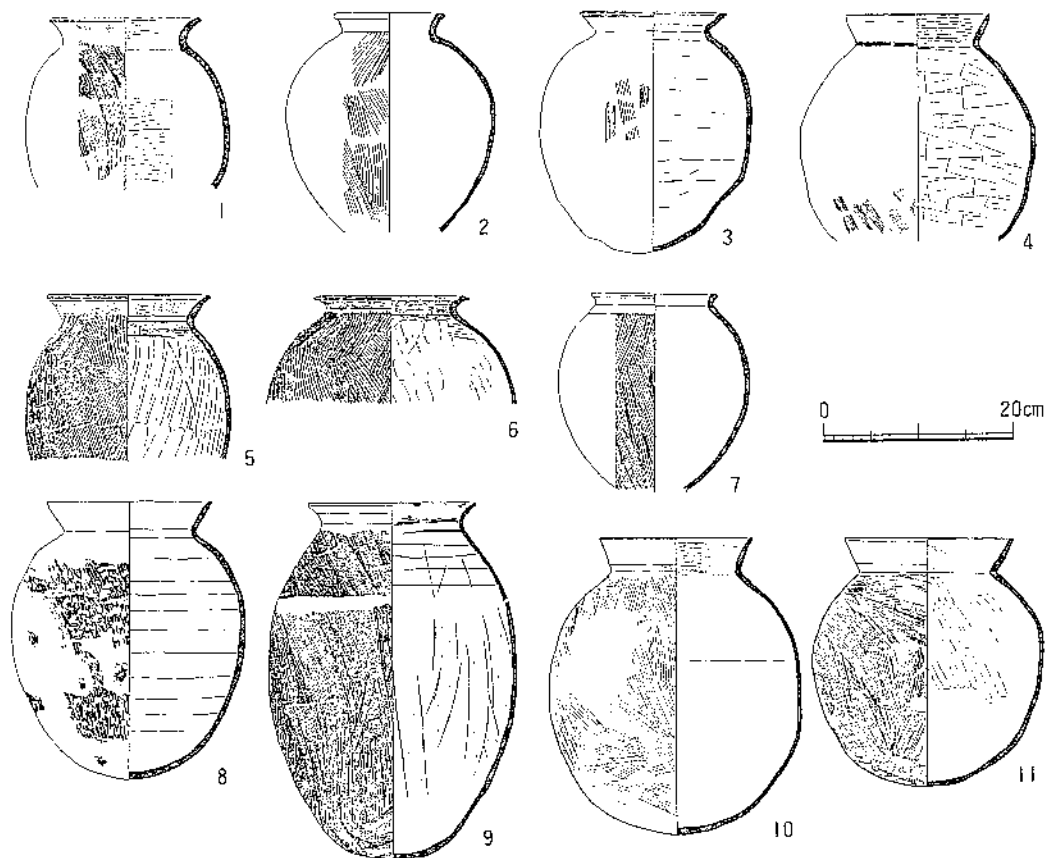
ここではまずカマド採用以降の竪穴住居出土遺物の中で、法量によっておよそ大・中・小の3つに分類される内の大型甕を取り上げてその変遷を明らかにしていく。ここで扱う大型甕がすなわちカマド採用後に長胴化して、いわゆる長胴甕へと変遷していくものと考えている。

なお、土師器甕の時期の比定は原則として共伴して出土している須恵器の年代観に基づいている⁽⁷⁾。変遷図に示した時期区分は、I期を5世紀後半から6世紀前葉(陶邑田辺編年TK47型式)まで、II期を6世紀後半頃(TK43型式)まで、III期を7世紀前半頃(西編年飛鳥I期)まで、IV期を8世紀初頭頃(飛鳥V期)までとして設定している。

また、土師器甕の体部が長胴化していく現象を数量化してとらえるために、「器高/体部最大径」を算出して長胴係数として表した⁽⁸⁾。第1図は今回取り扱った資料の中で、長胴係数の明確なものを抽出し、係数の時期別の推移を示したものである。そこには、長胴係数が1.25未満のもの、1.25以上1.50未満のもの、1.50以上のものといった3つのまとまりをみることができる。本稿で



第1図 竪穴住居出土土師器甕長胴係数表



- 1・2. 長浜市柿田遺跡SH67 3・4. 甲良町下之郷遺跡SH77
 5・6. 秦荘町軽野正境遺跡SB1 7. 蒲生町堂田遺跡SH8710
 8. 守山市吉身北遺跡SH1 9. 守山市吉身北遺跡SH2 10. 大津市神田遺跡

第2図 竪穴住居出土土師器甕 (I期)

はそれらのまとまりを各々、A類甕、B類甕、C類甕として記述を進めていく。

第2～5図は土師器甕の変遷を時期別に集成して示したものである。以下、それらをもとにⅠ期からⅣ期の時期毎の概略と、そこから看取できる2・3の点について述べてみる。

(1) Ⅰ期（5世紀後半～6世紀前葉）

この時期は竪穴住居にカマドが採用された段階にあたる。近江においては秦荘町軽野正境遺跡の例などからカマドの採用時期は5世紀後半代とみられる⁽⁹⁾。Ⅰ期は、5世紀後半から6世紀初頭（TK47型式）までの時期とした。

Ⅰ期の資料としては、長浜市柿田遺跡⁽¹⁰⁾、甲良町下之郷遺跡⁽¹¹⁾、秦荘町軽野正境遺跡⁽¹²⁾、蒲生町堂田遺跡⁽¹³⁾、守山市吉身北遺跡⁽¹⁴⁾、大津市神田遺跡⁽¹⁵⁾の例などをあげることができる。

この時期の甕は、守山市吉身北遺跡の例を除いては長胴係数がおよそ1.00から1.25までの範囲にある。このことは、Ⅰ期以前の土師器甕の長胴係数と大差がなく、カマド採用に伴うような甕の長胴化といった現象はみられない⁽¹⁶⁾。全体的には卵型の体部を持ち、外面にハケメ調整、内面にケズリ調整もしくはナデ調整を施している。口縁部の形態は外反気味に開くものや、端部を横方向に引き出す形状のものなどがある。前段階の甕の形態との間に、手法上においても大きな画期は認められない。

なお、守山市吉身北遺跡例にみられた様な長胴係数が1.25を大きく上回るものをどう理解するか。大阪府堺市大庭寺遺跡出土の初期須恵器の資料において甕などの新来の器種のひとつとして長胴の甕（韓式系土器）が認められる例があることから⁽¹⁷⁾、あるいはカマドの採用と共にそれに伴う新たな調理容器としての長胴形の甕が甕や鍋とともに地方に伝播してくることが想定できる。しかし、この時期の近江での状況を見る限りその定着は見られないようである。カマドとセットでどの様な新たな器種が搬入されたかということと併せて検討すべき点である。

(2) Ⅱ期（6世紀前半～6世紀後半）

甕の長胴係数が1.25以上1.50未満であるB類甕が認められるようになる時期で、6世紀前半（MT15型式）から6世紀後半（TK43型式）までをあてている。

長浜市柿田遺跡、五個荘町木流遺跡⁽¹⁸⁾・平阪遺跡⁽¹⁹⁾、能登川町斗西遺跡⁽²⁰⁾、栗東町辻遺跡⁽²¹⁾の出土例を資料として示した。湖西地域においては当該期の良好な資料を欠いている。

長浜市柿田遺跡の甕⁽¹⁸⁾は6世紀前半（MT15型式）段階のもので、長胴係数は1.46となっており顕著に長胴化が認められる。体部は外面全体にハケメ調整、内面に板ナデもしくはナデ調整を施し比較的幅の狭い単位の粘土紐の巻き上げ痕が認められる。口縁部は若干外反気味に開き、端部を上方につまみ出して断面三角形を呈している。柿田遺跡においてはこの時期以降7世紀中頃に至るまでこの形態の甕が主流を占めている。

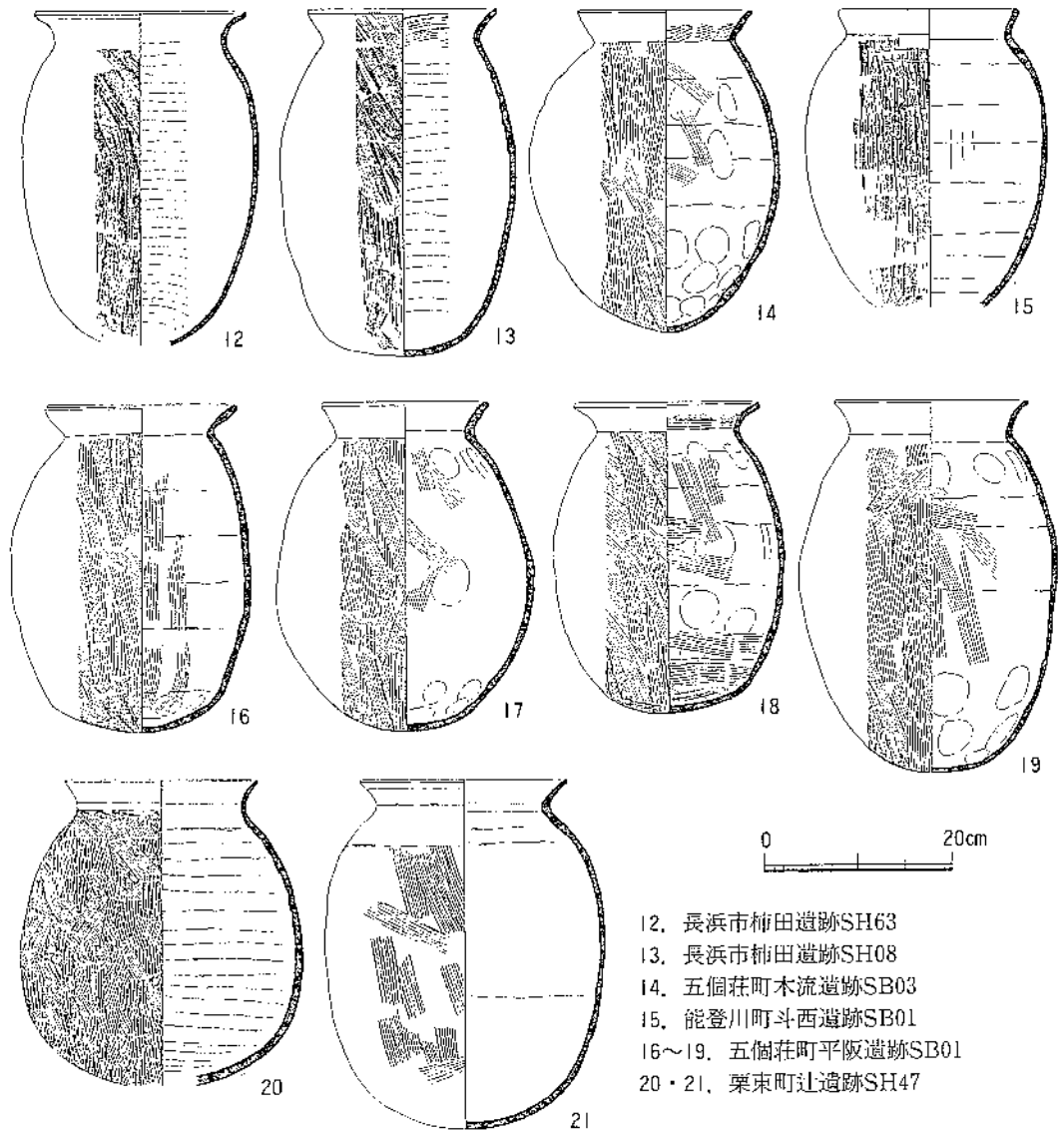
湖東地域においても6世紀前半段階にはB類甕が認められるようになる。この地域の甕は体部外面全体にハケメ調整、内面はナデ調整と部分的にハケメ調整を施し、やや幅の広い粘土紐の巻き上げ痕が内面に観察されるといった共通した特色を見ることができる。口縁部は外反気味に開

いて端部を丸くおさめるもの、端部に外傾する面を持つもの、端部を上方に屈曲させて丸く納めるものなどの形態が認められる。

湖南地方の例では、栗東町辻遺跡で幅の狭い粘土紐の巻き上げ痕の認められるものや、巻き上げ痕が顕著には残らないものなどがある。

(3) III期（6世紀末～7世紀前半）

縦の長胴係数が1.50以上のC類甕、いわゆる長胴甕が出現する時期で6世紀末から7世紀前半（飛鳥I期）までをあてている。この時期においては近江の一部地域で竪穴住居から掘立柱建物へと住居の形態がすでに移行していることもあり、竪穴住居の検出例が減少する地域がある。



第3図 竪穴住居出土土師器甕（II期）

この時期に見られるC類甕は、湖東地域の甲良町下之郷遺跡例の様に長胴の体部の内外面全体にタテ方向のハケメ調整を施し、口縁部は若干内湾気味で直線的に開き、端部に内傾する面を持つもので、ヘラ記号を口縁部内面に刻むものがある。この類のC類甕をC1類とする。湖西北部地域の今津町弘川遺跡⁽²²⁾や、湖北地域の余呉町桜内遺跡⁽²³⁾の出土例は若干下之郷遺跡の出土例に後出するものであるが、同じC1類の特徴を持ちヘラ記号を有する点でも共通している。

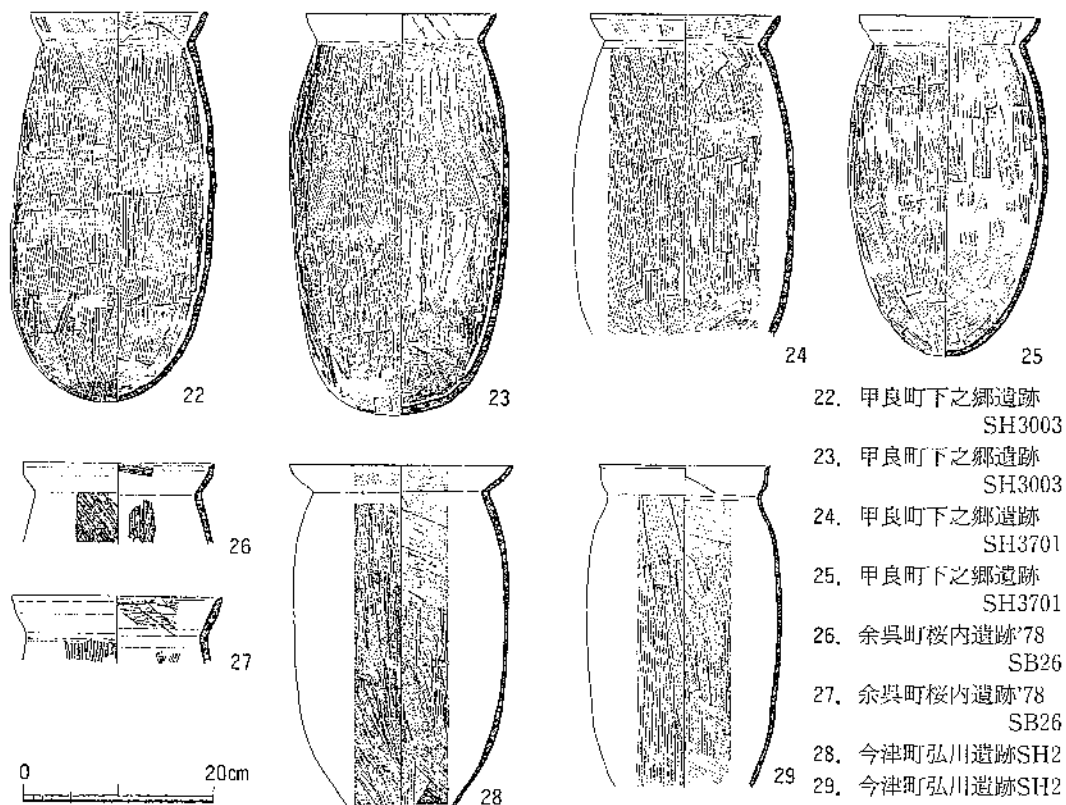
(4) IV期（7世紀中頃～8世紀初頭）

III期において出現した長胴係数が1.50以上の類甕の検出例が増加する時期で、7世紀中頃から8世紀初頭（飛鳥II期からV期）までをあてている。

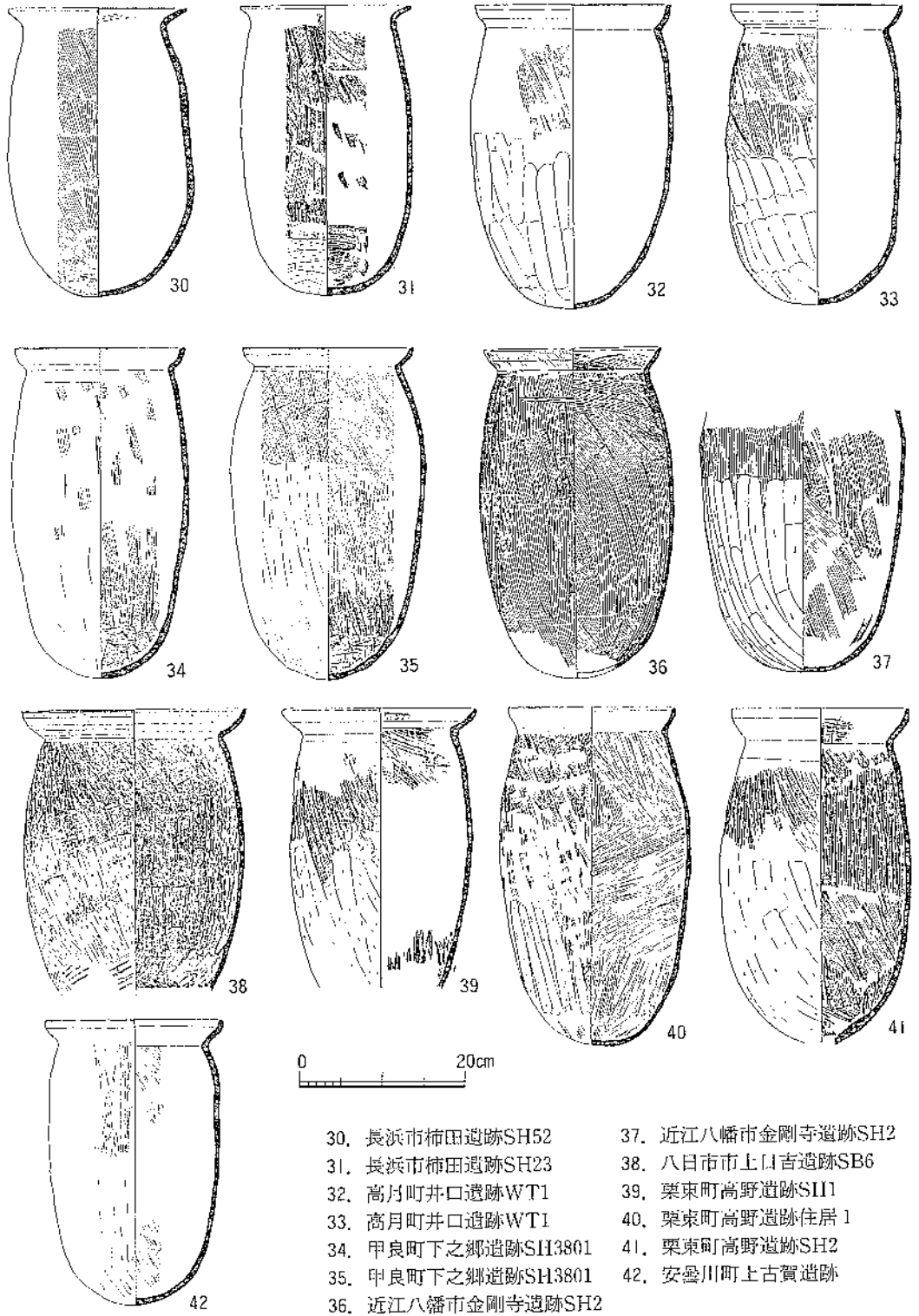
長浜市柿田遺跡、高月町井口遺跡⁽²⁴⁾、甲良町下之郷遺跡、近江八幡市金剛寺遺跡⁽²⁵⁾、八日市市上日吉遺跡⁽²⁷⁾、栗東町高野遺跡⁽²⁸⁾、安曇川町上古賀遺跡⁽²⁹⁾の出土例を示した。

この時期のC類甕の主流を占めている形態は、長胴の体部の外面にはハケメ調整し下半部にケズリ調整を施し、内面にはハケメ調整をする。口縁部は内湾気味に開き、端部に内傾する面を持つもので、C1類と同様にヘラ記号を刻むものがある。口縁部の内湾の度合いはC1類よりも強くなる。この類をC2類とする。

C2類甕以外の例として長浜市柿田遺跡出土の甕⁽³⁰⁾がある。II期の同遺跡出土のB類甕に継続する、長胴係数が1.55のC類甕である。体部外面全体にハケメ調整を施している。IV期後半には



第4図 竪穴住居出土土師器甕（III期）



第5図 竪穴住居出土土師器甕（Ⅳ期）

底部外面にケズリ調整を施すもの(31)などが見られる。

以上、近江における竪穴住居出土資料に限って土師器甕の変遷を概観してみた。5世紀後半におけるカマドの採用以降、C2類とした長胴甕の出現にいたる土師器甕の変遷にはいくつかの画期が認められるようである。

竪穴住居におけるカマドの採用時においては、土師器甕の顕著な長胴化は認められず、基本的に布留式甕との間に形態上の隔絶は見られない。第1の画期はB類甕の出現とすることができよう。このB類甕の出現はカマドの採用がもたらした甕の長胴化として理解することができる。このB類甕においては、長浜市柿田遺跡や湖東地域の例に見られるように、地域色とも言うべき形態上のまとまりがある可能性が指摘できるものの、後の群程度さらには近江全体に共通するような斉一性は見いだせない。

第2の画期はC類甕の出現である。Ⅲ期段階のC1類甕には地域を越えた形態的・技術的な斉一性を見ることができる。このC1類甕の分布は、近江全体に斉に伝播しているといった状況ではなく、いくつかの地域に点在して出現しているといった状況がある。そして、C1類甕にみられるヘラ記号の存在や形態上の特徴はその地域内における系譜を追うことが出来ないものである。C1類甕をⅢ期において竪穴住居から出土している遺跡は、後に郷倉へと発展していく今津町弘川遺跡や、この時期から扇状地の再開発が実施される甲良町下之郷遺跡などで、他地域との関連や他律的な開発・発展が考えられる遺跡であることから、C1類甕の存在に搬入などの外的要因を考えていくべきだといえる。

なお、このC1類甕の分布について近江の隣接地域にある京都市山科区中臣遺跡において竪穴住居から出土している例がある⁹⁰⁾。次章で述べるC1類甕の分布状況と考慮併せて注意すべき状況である。

第3の画期はC2類甕の出現であり、その分布のあり方にはほぼ近江全体への広がりを見ることが出来る。形態的にはC1類甕の系譜上のものとしてとらえられるものであるが、検出例の増加などから、近江における土師器の製作技術上の斉一性が明瞭になってくる。

このように竪穴住居出土の土師器甕の変遷をたどってみると、A類甕からC2類甕に至る形態上の変化は、分布のあり方の変容をも伴うものであり、カマドの採用に伴う影響だけからではなく、その他の要因や土師器の生産体制のあり方の変化なども含めつつ甕の変遷の背景を検討していく必要があるといえる。

3. C類甕の竪穴住居以外での出土例

先に述べたC類甕には、いわゆる近江型の長胴甕が含まれている。ここでは近江型土師器の成立過程を考えるための前作業として竪穴住居以外でのC類甕、特にC1類・C2類甕の出土例について検討してみる。

該当する例としては、土壙もしくは横穴式石室において土器棺として用いられたものが大半であり、その他に横穴式石室に副葬品として供献されたもの、湖西南部地域にみられる切妻大壁造

り住居や特殊カマド遺構に伴うもの、溝等の埋土や土坑、須恵器窯の灰原、遺物包含層からの出土例などがみられる。

土壙において土器棺として利用された例は湖西南部地域に多くみられるようであるが、湖北地域の余呉町桜内遺跡での4基の土器棺墓や湖東地域の能登川町中沢遺跡⁽³¹⁾の例なども知られている。これらの土壙は単独にある検出例が多く、土器棺墓群を形成するような状況はみられない。湖西南部地域周辺では後期古墳群中、横穴式石室墳の墳丘裾部付近において検出される例がいくつか見られる。

土器棺の形態としては、単棺のもの、C類甕2個体による合口棺のもの、C類甕と体部球形の甕の合口棺のものなどがある。年代は、大津市錦織遺跡⁽³²⁾の例などではC1類甕が用いられていることから7世紀前葉、桜内遺跡や中沢遺跡の例などはC2類甕であることから7世紀中頃以降の時期と考えられる。

一方、横穴式石室において土器棺として利用された例は大津市坂本蓮華院遺跡⁽³³⁾と京都市旭山E-3号墳⁽³⁴⁾が知られる。前者はC類甕の合口棺と見られ、後者は単棺で、共に小型の横穴式石室からの出土である。

横穴式石室の副葬品として用いられたものとして長浜市諸頭山2号墳⁽³⁵⁾の例がある。7世紀中頃の時期と見られ、胴部に圈線を巡らせたC2類甕が出土している。体部球形の土師器甕が横穴式石室において副葬される例は多くあるがC2類甕の例はこの他にはあまり見られない。

埋葬に関わるもの以外として、大津市穴太遺跡の特殊カマド構築時に埋め込まれたとされる甕はC1類甕で7世紀初頭頃の年代が与えられる⁽³⁶⁾。また、大津市南滋賀廃寺跡では建物との関係は明らかではないカマド状の遺構から、相伴している須恵器で7世紀前葉のものと見られるC1類甕の口縁部が出土している⁽³⁷⁾。この他に土坑や溝、遺物包含層、須恵器窯の灰原などで例があるが年代確定の困難なものや、7世紀中葉以後のC2類甕段階のものがほとんどである。

以上のことから、C類甕の堅穴住居以外の出土例では、土器棺として用いられるものが多く、湖西南部地域ではC1類甕段階であるⅢ期から出現し、その後、湖北地域の桜内遺跡などに点在する状況で伝播していったようである。また、その他の出土例を含めても、Ⅲ期のC1類甕は湖西南部地域以外では殆ど出土例がなく、前章での状況と総合するとC1類甕は湖西南部地域周辺にその分布の中心があることが明らかになってくる。そしてⅣ期に至って斉一性をもったC2類甕が広範に分布するようになる状況も、前章での流れと状況を同じくするところである。

このようなことから、いわゆる長胴甕の出現段階のC1類甕は、堅穴住居から掘立柱建物への移行が6世紀後半段階において進んだと見られる湖西南部地域において7世紀初頭前後に生産が開始された状況が見られることとなり、5世紀後半以降のカマド採用に伴う甕の長胴化と直接関連づけてC1類、C2類甕の成立要因を論じるには問題が生じてくる。C類甕にみられる斉一性の背景については次章において述べるが、長胴化の要因については移動式カマドや特殊カマド、土壙での利用状況との関係や、器形の外部からの移入などからの検討を加えていく必要がある。

4. 土師器甕の変遷とその背景

ここまで述べてきた5世紀後半からおよそ8世紀初頭に至るまでの土師器甕の変遷は、土師器の生産体制のあり方や社会的な背景とどのような関連性を持ち、それを反映したものであったかについて考えてみる。時期区分は先に土師器甕の変遷を示す際に設定したものに從って述べる。

(1) I期（5世紀後半～6世紀前葉）

この時期は、竪穴住居においてカマドが出現し、また須恵器が新たなる器種として日常容器の土器組成の中に入ってくる時期である。須恵器の地方における生産もこの頃から徐々に開始され、近江においても水口町器古窯跡など地方窯出現期の例が知られる。県下の状況では須恵器が日常容器として用いられるようになるのはカマドの出現と同時期もしくはそれにやや遅れるようである。器形として蓋杯類が多く、甕の出土例も見られる。

土師器においては新たなる器形として甕や鍋の出現がみられるが、全体的な器種構成においては供膳容器として高杯の占める割合が高いなど前段階との間に大きな変化はみられない。これは先にみた甕の器形の様相と同じくするところである。

横山浩一氏は、土師器は同時代の須恵器や朝鮮半島の土器との間に器形の模倣などの交流はあるが、技術的には土師器工人はきわめて保守的・閉鎖的であったとし⁽⁹⁸⁾、西 弘海氏は、須恵器の導入が土師器に与えた様式的な変化はけして大きくはなく、5世紀後半から6世紀前半の土師器のあり方は弥生時代後期から続く布留式の自然な発展として理解できるものとしている⁽⁹⁹⁾。I期段階の土師器生産のあり方は両氏の考え方によって理解できるものであり、基本的には竪穴住居におけるカマドの採用や須恵器の地方窯の出現は、現象面として土師器生産に大きな変革をもたらしておらず、土師器工人はその伝統性を保持していたようである。

(2) II期（6世紀前半～6世紀後半）

この時期はB類甕の出現というカマド採用後の器形の変化が認められる段階であるが、竪穴住居等から出土する土器組成においてもI期との間に違いを見ることができる。土師器の高杯の出土例が減少して6世紀中頃に至ってはほとんど見られなくなり、それにかわって須恵器の高杯が普及してくる。煮沸具には土師器、貯蔵には須恵器、食膳具には土師器と須恵器といったように、用途に応じた器種の使い分けが行われ、須恵器の一般化にともなう土師器と須恵器の土器複合が進展して新たなる土器様式が成立したといえる。

土師器生産のあり方は、したがって須恵器の生産と供給を見越した生産、須恵器との土器複合の結果において土師器に求められた器形の生産を行っていく状況となる。このような土師器生産と須恵器生産との相互関連は、この段階に急速に進んだと見られる。

その背景としては、横穴式石室と共に土器の多量副葬を伴う葬送儀礼が導入され、そして後期古墳の盛行による土器需要の拡大がある。需要の拡大は供給体制へのさまざまな影響をもたらす。須恵器の地方窯の増加・拡大、量産化に伴う手法上の簡略化などが指摘される所であり、土師器生産のあり方においても、須恵器生産との関わりの中でその特質である定形化と量産化の原

理が導入されていくことになると考えられる。

土師器生産におけるこのような状況は、特に湖西南部地域において明瞭にみることができ、次のC1類、C2類甕の出現との関わりの中でも注意すべきである。

湖西南部地域においては、特に坂本から南滋賀にかけての比叡山麓に数多く分布する後期古墳群の横穴式石室の副葬品として土師器の炊飯具形土器や体部球形の丸甕が出土する例が多く見られる。この中で、丸甕の口縁部内面や底部外面などにヘラ記号を刻んだものがある。時期的には6世紀中頃以降のものでⅡ期でも後半段階にあたる。ヘラ記号が何を意味するものかについては諸論あるところであるが、均質な製品を大量に生産する状況の中で刻み込まれるのがヘラ記号であり⁽⁴⁰⁾、埴輪や須恵器などに例がみられる。湖西南部地域の土師器甕においてヘラ記号が刻まれていることは、この地域の土師器生産が須恵器生産の特質である量産化と定形化の原理を導入したことを示すものであり、前段階まで見られた土師器生産の伝統性は6世紀中頃以降変質していったと見ることができる。ここに、湖西南部型土師器とでもいうべき均質で定形化した土師器を多量に生産する新たな土師器生産体制への進展がある。

ただしこの土師器生産体制の変容が汎近江的な状況としてみられる段階にまでは達しておらず、現状では湖西南部地域が土師器生産においてやや先進的様相を呈している感が強い。

(3) Ⅲ期（6世紀末～7世紀前半）

この時期はC1類甕が出現する段階である。C1類甕は先に述べた様に、湖西南部周辺地域において分布の中心を持ち、ヘラ記号を刻むことや形態、胎土等にⅡ期において湖西南部型土師器と呼称した甕との共通する特徴を有することから、この両者は同じ生産体制下において製作されたものと考えることができ、C1類甕は湖西南部型土師器の中の一つの器形として位置づけられる。

Ⅱ期段階との違いは、湖西南部型土師器の分布圏が拡大し、他地域への波及が見られることである。その際、一律に他地域に供給していくような状況にはまだなっておらず、それぞれの地域と湖西南部地域との何らかの地域関係を反映して、その伝播において遅速があると考えられる。

このような湖西南部型土師器の流通圏の拡大がみられる一方で、このⅡ期段階では他の地域においても地域色を持った土師器生産が引き続いて行われている。野洲町小堤遺跡SX1出土の一括遺物は均質で規格性のある製品相を示しており⁽⁴¹⁾、前段階で顕現化してきた須恵器生産との関わりの中で変容した土師器生産体制による、湖西南部型土師器とはまた別の定形化した小地域型の土師器の存在を見ることができる。この段階に至っては郡単位程度の地域的なまとまりが形成されつつある状況が想定される。

(4) Ⅳ期（7世紀中頃～8世紀初頭）

この時期はC2類甕が近江全体に分布するようになる段階である。このC2類甕は湖西南部型土師器であるC1類甕の系譜上のものとしてとらえられるが、その汎近江的な分布や形態上の斉一性には湖西南部型、小地域型から逸脱した近江型と呼称するに足るものであろう。

この近江型土師器と呼称する、汎近江的に分布する定形化した土師器が、各地域の土師器の工人が湖西南部型土師器の製作技法に基づいた共通の技法を共有するような生産体制へと変容したことにより作られたものであるのか、湖西南部型土師器の生産体制が一元的に多量生産した製品を各地域に供給したものであるのかという問題がある。この時期においては、各地で盛んに築かれていた後期古墳が終末を迎える一方で、寺院の建立が始まり、また近江大津宮遷宮といった社会的な動きがある。土器生産においては古墳築造の終末にともない副葬品としての土器の需要が失われることによって生産量を調整し、生産体制を集約化にむけて再編していく必要が生じ、また寺院建立に伴う瓦生産の開始が瓦当範の共有や製作技術の伝播など地域を越えた工人間の関連を生み、また土器生産体制の再編を促したであろうことは想像に難くないことである。

先の問題については、細かな技法的な分析や胎土からの産地の同定などから検討していかねばならないが、近江型土師器は7世紀後半における土器生産体制の再編と集約化が行われた新たな状況下において生産され始めたものであり、その際に湖西南部型土師器の製作工人もしくはその掌握組織が近江における土師器生産の中心的・指導的役割を担ったと考えることができよう。そして土師器甕の在り方だけからではあるが、この時期に近江が一つの地域としてのまとまりを持ち始めた状況を見ることができ、その背後には近江の各地域をひとまとめにして統括していこうとする政治的な動向のあることが想起される⁽⁴²⁾。そしてその動きにおいて湖西南部地域が重要な役割を担っていた可能性もまた考えられるのである。

一方、このような流れの中において長浜市柿田遺跡ではC2類甕は使用されていない。底部外面にケズリ調整を施すようにはなるが、全体的な形態上の特徴はII期段階以降にこの遺跡において使用されてきた甕の系譜に乗るものであり、地域色は保持され続けている。この遺跡では新羅系の獣面軒瓦を出土しているが、C2類甕が供給されていない背景にはこの地域と近江の他地域との政治的関係の影響があるいはあるのかも知れない。他遺跡の例も含めてさらに検討していくべき問題である。

5. 近江型土師器の成立とその系譜

本稿の最後に、近江型土師器についての考えをまとめておく。近江型土師器の内の長胴甕の特徴については冒頭においてすでに述べた。それは本稿においてC2類甕としたものであり、7世紀中頃以降に土師器生産体制の変容の中、汎近江的な分布と技法的な斉一性をもって供給され始めることによって成立したものである。そして、その近江型土師器C2類甕は湖西南部型土師器C1類甕、そしてさらに6世紀中頃に出現するヘラ記号を刻むなどの特徴を持つ湖西南部型土師器にその系譜を求められると考えてみた。

このことより、ヘラ記号やその他の形態上の特徴から一つの土師器甕が近江産であるかどうかという認定は6世紀中頃以降可能になるが、この段階でのその土師器の在り方は湖西南部型とすべきものであり、分布やその他の要素において汎近江的なまとまりが認められる段階の土師器を近江型とするのであれば、その成立は7世紀中頃以降となる。この様に定義した近江型土師器は、7世紀中頃段階において進行する古代的な土器生産体制の再編と集約化によって成立したもので

あり、近江に分立する小地域を一つにまとめて総括していこうとする政治的動向もその背後にあるものと憶測される。

以上の考えは、「近江型」を先に述べたように定義した場合のものであり、近江産であることを認識できる土師器を「近江型」とする考えにたつものではない。また、特に長胴甕の在り方からその成立への諸段階を検証しており、他の器形を含めた場合の状況を確認していかねばならない。

本稿では、全体的に大雑把な憶測となったが、5世紀後半以降の土師器甕、特に長胴化していく甕を資料に用いて土師器の生産体制の変容や近江型土師器の成立についての考えを示すことを試みた。今後、細かな検証を加えることによってその不備を補っていきたい。

註

- (1) 田辺昭三ほか『湖西線関係遺跡調査報告書』湖西線関係遺跡発掘調査団 1973年
- (2) 小笠原好彦「七・八世紀の土師器とその流通」(『考古学研究』第27巻第2号(106号) 考古学研究会 1980年)
- (3) 小笠原好彦「古代の近江型土師器甕と二つの特徴」(『滋賀文化財だより』No.82 勸滋賀県文化財保護協会 1984年)
- (4) 宮成良佐「「近江型長甕」について」(『宮司遺跡・十里町遺跡調査間報告書』長浜市教育委員会・宮司遺跡調査団 1977年)
- (5) 大橋信弥「近江における長胴甕の出現と展開—カマド出現と関連して—」(『吉身中遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・勸滋賀県文化財保護協会 1982年)
- (6) 田中勝弘「いわゆる近江型土師器に関する一・二の問題」(『史想』第20号 京都教育大学考古学研究会 1984年)
- (7) 時期の比定については一部報告書の記載時期と異なるものがあるが、それらは出土状況の説明や共伴遺物などを勘案して検討したものである。
- (8) 厳密には、「(器高—口縁部高)／体部最大径」とすべきであるが、本稿においては支障の無いものと考え、器高から口縁部高を減じることはしなかった。なお、算出に用いた数値は報告書等の実測図面から測定したものである。
- (9) 1992年、能登川町西ノ辻遺跡において4世紀前半とされる時期のカマドが検出され、5世紀後半代よりも大きくカマドの採用時期が遡ることが明らかになった。(杉浦隆支「能登川町西ノ辻遺跡の調査」『滋賀考古』第8号 滋賀考古学研究会 1992年) 今後、4世紀段階にまで遡るようなカマドの例が資料として増加する可能性は否定できないが、現状においてはカマドの定着時期は5世紀後半以降と見るのが妥当であり、西ノ辻遺跡例にみられる初期のカマドは集落内において継続することなく若干の時間的な断絶がその定着までの間に認められるようである。
- (10) 仲川 靖『柿田遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・勸滋賀県文化財保護協会 1989年
- (11) 大崎哲人『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XV—2』滋賀県教育委員会・勸滋賀県文化財保護協会 1988年

- (12) 石橋正嗣・石原道洋・近藤 滋『軽野正境遺跡発掘調査報告書』秦荘町教育委員会 1979年
- (13) 宮崎幹也『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XV-3-蒲生郡蒲生町堂田・市子遺跡-』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1988年
- (14) 岩崎 茂『吉身北遺跡発掘調査報告書』守山市教育委員会 1986年
- (15) 松浦俊和『大津市埋文化財調査報告書(5) 真野・神田遺跡』大津市教育委員会 1976年
- (16) I期以前の甕の資料として、古墳時代前期の土器がまとまって出土している新旭町森浜遺跡の報告書(兼康保明ほか『森浜遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1978年)に掲載されている土師器の甕の中から長胴係数の計測が可能な25点を抽出して数値を調べたところ、大半が長胴係数1.2未満の範囲にあり平均値は1.11であった。
- (17) 玉井 功ほか『陶邑・大庭寺遺跡』大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1989年
富加見泰彦ほか『陶邑・大庭寺遺跡II』大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1990年
- (18) 林 純『五個荘町文化財調査報告書4 木流・平阪遺跡』五個荘町教育委員会 1985年
- (19) 註18文献と同じ
- (20) 植田文雄『能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集 斗西遺跡』能登川町教育委員会 1988年
- (21) 木戸雅寿・清水 尚・細川修平『県道高野・守山線特殊改良工事に伴う高野・辻遺跡発掘調査報告書II』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1990年
- (22) 兼康保明ほか『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VIII-3』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1981年
- (23) 田中勝弘『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書XI-伊香郡余呉町桜内遺跡-』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1989年
- (24) 田中勝弘ほか『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書V』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1978年
- (25) 大崎哲人『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVII-2 下之郷遺跡』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1990年
- (26) 平井美典『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVIII-7 金剛寺・後川遺跡』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1991年
- (27) 近藤 滋・松澤 修『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VII-2』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1980年
- (28) 平井美典『琵琶湖大橋有料道路建設工事に伴う栗東町高野遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1987年
- (29) 田中勝弘・兼康保明ほか『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VI-1』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1979年
- (30) 『中臣遺跡発掘調査概要 昭和56年度』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1982年など

- (31) 山本一博ほか『能登川町埋蔵文化財調査報告書第15集 中沢遺跡(第4次)・正楽寺遺跡(第3次)』能登川町教育委員会 1990年
- (32) 大橋信弥・三宅 弘ほか『錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1988年
- (33) 景山春樹「土師式合口甕棺葬の一例—近江坂本蓮華院遺跡について—」(景山春樹『仏教考古とその周辺』雄山閣出版 1974年)
- (34) 木下保明ほか『旭山古墳群発掘調査報告』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1981年
- (35) 田中勝弘『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1974年
- (36) 青山 均ほか『大津市埋蔵文化財調査報告(Ⅱ) 穴太遺跡(弥生町地区)発掘調査報告書』大津市教育委員会 1989年
- (37) 林 博通・葛野泰樹「史跡南滋賀町廃寺跡発掘調査概要」(『昭和51年度滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会 1978年)
- (38) 横山浩一「土器生産」(『日本の考古学』Ⅴ 古墳時代(下) 河出書房 1966年)
- (39) 西 弘海「土器様式の成立とその背景」(西 弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986年)
- (40) 山中 章「古代都城の線刻土器・記号墨書土器」(『古代文化』第41巻第12号 財団法人古代学協会 1989年)
- (41) 杉本源造「第1章 小堤遺跡」(『昭和61年度 野洲町内遺跡発掘調査概要』野洲町教育委員会 1987年)
- (42) 林部 均氏は「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」(『考古学研究』第39巻第3号(155号) 考古学研究会 1992年)において、畿内産土師器の西日本における出土の在り方から飛鳥Ⅱ期に画期を認め、そこに畿内にあった政権が律令国家とよばれる新しい支配体制の確立にむけて最初に地域支配の再編成を行った時期との対応を指摘している。近江におけるいわば在地産の土師器生産の在り方に認められた画期と、林部氏のいう画期が機を一にしていることは注目すべきことと思われる。本稿で述べた「背後にある政治的動向」として、林部氏のいう「律令国家成立にむけての地方支配の再編成という動き」を想定することが出来るのかも知れないが、その関わりについては今後の課題として取り組んでいきたい。

編集後記

今年の『紀要』は例年になく原稿の集まりが早かった。これも偏に各執筆者の日々の精進の賜物か。

今後も、洛陽の梓価を高めるような『紀要』であり続けたい。

編集者

平成5年3月 初版
平成6年3月 2刷

紀 要 第 6 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241